

史傳



エドワード、デロング（承前）

米溪

落ち付きたる態度に、一糸亂れざる應答振、無邪氣なる内に、凜として、犯すべからざる風を備へ、言葉さへ奇麗に、清き心の流れを酌めるなど同じ年頃の兒童の、いと、人手に餘るものも多かるに想ひ比へては、一入、心も動かされて、母同胞の上なども想ひ装へらるゝに、ハリスもひたすら感に堪へで。

「斯程迄の訓育を垂るゝ母を持てるとは、扱も幸福の極みよ。將た、之程迄に、清き誠心持てる

少年を、我が子として、育つる人の、宿世も思はるゝぞかし。あはれ、克く母に事へよ。温かなる、愛の懷に慈まれて、誠の教を受くる身は、努め、其の教に背くまじきぞ。慈母の教は應て、身の光となりて、前途を照すべきに、夙に、夜に、教のまゝに怠らで、己か榮譽を擔ふと共に、老い行く母の行く末に、杖とも、柱とも、頼まるゝ、其身の光りに、母の笑顔を迎へよかし。

「あらッ！」

露もつ眼を抑へ敢へず、稍、頭を擡けて、面映げに、又、伏目になりツ、答へぬ。

「母は既に逝りぬ。病の床に在りてより、吾れなくば安せられず、幾十日の病氣は、老い行く秋と共に、次第に心細くなりて、遂に、黄泉の客

となりしかば、野邊の送りも身一つに、書物の事も心に掛れど、夫れや是れやに、月日を過しぬ。

「御身の名は何と云ふか、」

「エドワード、デロング！」

「定めし、父上は家に在さん、」

「否とよ、父は蚤く、吾か稚さ頃に逝りて、母の手一つに成人ぬ。」

「何處に住へるか。」

「此處より殆んど五十哩許りなる、ラインウードの街に、！」

「好し、さらば、曩日求めしは何の書なるか、」

「讀本と、ラテン語の字典なり。」

「領取證……其の間違たる……とは如何。」

「聽て、少年のポケットより取り出でしを見るに

主管のモルレーの印あり。之れ、前さに店頭にありて、少年と推問答せしものなれば、ハリス獨り首肯しツ。

「一寸此處へ、モルレー！」

折ふし、客の出入繁さに、主管等は孰れも、其の預かれる所に鞅掌し、モルレー亦、隣室に在りて、顧客に應接しなから、腰を屈め、笑を湛へ、小心翼翼、左右を顧聘して、忙はしげに振舞へりしかば、ハリスは更に膝を進めつ、又デロングに語を續けぬ。

「エドワード！、御身の言ふ所、誠に理りわれは最早、決して、其の行に對して報酬ふとは云はざるべし。さりながら、又、別に、望む所もあり。斯かる行に對して、予の心の感に堪へたる志を表白することを否まであれ。之れ、聽て

御身に、其の別れたる母より受けて、志高く、勝れたる教を、末長く心に銘せんことを、望むこそ……………

其處の、書架の内より、圖書拾部を探れ、其は、既に購へる外、更に撰べ、欲する所は撰ぶに任せて。今日の贈り物とせん。あはれ、今後に於ても、常に、今の如くあれ。深く記せよ。努、忘れざれ。微細なるものなりとも、己か誠心を欺かざれ。小を忽にせざれ。微を侮らざれ御身の母は、徳高く、清く、御身を教へたることを記せよ。若し、將た、事を謀らんとて、朋を思ふときは訪へ、誓つて、御身を助くべし、予は御身の朋たらん！

父を喪ひ、母に別れ、いとさへ、感情の動き易さに、今、此の親しく、懇ろなる詞を聴きては

獨り涙の止め敢へぬのみにあらず。デロングは、やがて、其の誠心置れる贈り物を謝し、感謝の詞も、濕び勝にて、一揖、堰き敢へぬ涙を袖に拂ひて、店を辭しぬ。

日は、はや傾きて、曇りたる空の景色、雲にや雪にや、風は襟元を掠めて、往き來の人の足も急かはしげなる間を縫ふて、深き情心を包める贈物抱へなから、歸る家路に、孤燈影暗さ頃、母の俤今は臆にだに見ること叶はず、今日の應答に、一入、慕かしさの勝る過ぎにし夢の迹辿りて、今宵の、わが家を想ひ見る時、果して、如何なる感想をや、小さき胸に宿すらん。

(未完)